

美術表現研究 講義「幼児表象画」縦断的記録の検証

竹永 亜矢 埴 和道

Art Expression Study-Review of the Longitudinal Record of the Unit "Young Children's Representative Pictures"-

Aya TAKENAGA

Kazumichi HANAWA

Abstract

Painting and arts and crafts activities in early childhood are important expressive activities for the sound physical and psychological development of children and to foster their power of expression and creativity.

This paper clarifies the characteristics of developmental stages of children as well as the influences of the environment and human relationships on their work by reviewing works created by two children in a longitudinal manner from the ages of three to six. It also discusses methods of educational support and instruction on arts and crafts based on the personality of individuals.

Keywords: art expression, young children's representative picture, expressive activity, development, arts and crafts education

要 約

幼児期の絵画や造形活動は、心身ともに健全に発達し、豊かな表現力や創造性を育む大切な表現活動である。

本論では、ふたりの子どもが3歳から6歳にかけて描いた縦断的作品群から、発達段階の特徴と環境や人間関係が与える影響について示唆し、ひとりひとりの個性に対応した造形教育支援、指導のあり方を呈する。

キーワード：美術表現・幼児表象画・表現活動・発達・造形教育

I. はじめに

筆者が担当する講義「幼児表象画」は0歳～6歳の幼児表象画の縦断的記録作品の鑑賞と解説から表象画発達の理解と保育者の支援、指導の方法を正しく行うことを学習目的として教授している。本研究は講義で解説している0歳から6歳までの幼児表象画の縦断的記録から、3歳から6歳までの縦断的絵画表現に焦点を当て、ジェローム・シーモア・ブルーナー（Jerome S. Bruner 1976）「表象絵画の発達段階における分類」動作的表象（enactive representation）映像的表象（iconic representation）象徴的表象（symbolic representation）段階の分類に則り分類した。また、描画発達の分類は、ローダ・ケロッグ（Rhoda Kellogg 1969）幼児絵画の発達から、スクリブル（scribbles）前期、スクリブル後期、ダイアグラム（diagrams／単体図）コンバイン（combines／結合図）アグリゲイト（aggregates／集合図）ピクチャーステージ（picture・stage／絵画期）の分類に則り幼児絵画表現の発達を解説したものである。

作者である子どもの主観、家庭環境、人間関係、保育所生活、保育支援や描画環境の設定記録から、幼児表象画の発達を検証し、子どもの生活環境と造形領域の観点から子どもの個性と描画発達の理解、家族や保育士の造形表現への関わりや支援のあり方を考察する。

また、この縦断的作品群（1972～1977）に見られる美術表現技法は、現在も保育園、幼稚園といった幼児教育現場で活用されている技法が多く含まれている。

これらの美術表現技法を造形教育に取り入れる意義と、2017年現在の幼児教育現場での活用状況を幼稚園教諭を対象とした「幼稚園での絵画表現技法に関するアンケート調査」の結果を報告する。

II. 方法

1. 比較方法

幼児教育現場で入園当初から描画した女兒Aと女兒Sの表象画から「人物」をテーマにした描画を抽出し、（1）J. S. ブルーナー（Jerome S. Bruner 1967）の表象の発達段階、（2）ローダ・ケロッグ（Rhoda Kellogg 1969）の幼児絵画の発達を、以下の観点に照らし合わせて比較する。

（1）ジェローム・シーモア・ブルーナー認知能力の成長と3つの表象

1) 動作的表象（enactive representation）

自己中心、外と内の区別が確かではない。動作による直接的な（感覚運動的）把握。

2) 映像的表象（iconic representation）

表面的な形のイメージ（映像）による対象の把握。

3) 象徴的表象（symbolic representation）文字・記号・言語による対象の把握

上記3段階の表象発達を遂げた成人においては、全ての表象を持ち合わせて存在している。

(2) ローダ・ケログ幼児表象画発達の特徴（描画の発達における分類）

幼児表象画の発達はスクリブル（scribbles）前期、スクリブル後期、ダイアグラム（diagrams／単体図）コンバイン（combines／結合図）アグリゲイト（aggregate／集合図）を経て、明らかに人物画を描いていると判断されるピクチャーステージ（picture stage／絵画期）へと絵画表現の発達がみられるとする解説に則り、下記の表 1 は、誕生日が 1 週間違いと近い姉妹の女兒 2 名（姉 A・妹 S）の縦断的作品群から人物画作品の描画発達を比較したものである。

表 1

描画発達	女兒 A	作品	女兒 S	作品
スクリブル前期	0 歳～	作品なし	0 歳～	作品なし
スクリブル後期	3 歳 6 カ月	a 入所初画		作品なし
ダイアグラム（単体図）	3 歳 8 か月	c, u	3 歳 7 カ月	b 入所初画
コンバイン（結合図）	3 歳 11 か月	e	3 歳 8 か月	d
アグリゲイト（集合図）	4 歳 5 か月～ 4 歳 10 か月	g, i, k	3 歳 11 か月	f
ピクチャーステージ （初期絵画期）	5 歳 5 か月	m, w	4 歳 5 か月～ 4 歳 9 カ月	h, j, v, x
ピクチャーステージ （絵画期）	6 歳 1 か月～ 6 歳 5 か月	o, q	4 歳 10 か月～ 6 歳 5 か月	l, n, p, r, t

2. 縦断的記録対象女兒 A・女兒 S について

(1) 縦断的記録作品制作幼児の家庭環境と年・月齢、描画時の状況

- ・家族構成：5 人家族（父、母、兄長男、A 長女、S 次女）
- ・女兒 A・S の年齢差：2 歳
- ・誕生日：女兒 A、10 月 15 日生まれ・女兒 S、10 月 8 日生まれ

誕生日が同じ月で週齢差が 1 週である為、両者の描画発達において、1、2 週の差異で描画発達の特徴が変化するコンバイン（結合図）の時期を除き、同じ時期に描写した作品の月齢差による表現差異の影響は少ないと判断できるものである。

(2) 保育所環境と縦断的作品群の保存（担任保育者のかかわり）

- ・担当保育士：女兒 A、女兒 S とともに同じ保育所に通い、入園（年少 3 歳）から卒園（年長 6 歳）までの間、ひとりの保育士が三年間、持ち上がりで担任している。
- ・作品の管理：女兒 A、女兒 S とともに保育所（年少・年中・年長）で制作した作品を担当保育士が一年間の制作順にファイリングし、その作品集を卒園時に保護者が引き継ぎ保管された。表 2 は女兒 A、女兒 S の縦断的作品の制作年齢比較表である。

表2 姉妹の縦断的作品制作年齢比較表 (制作時期は担当保育士による日付記録参照)

女兒 A (長女) 10 月 15 日生まれ		女兒 S (次女) 10 月 8 日生まれ	
描画年齢	作品 図 1～13	描画年齢	作品 図 1～13
年少クラス 入園 3 月 3 歳 6 ヶ月 3 歳 8 ヶ月 3 歳 8 ヶ月 3 歳 11 ヶ月 4 歳 5 ヶ月	図 1. 作品 a 図 2. 作品 c 図 11. 作品 u 図 3. 作品 e 図 4. 作品 g	1 歳 5 か月	入所前 作品なし
年中クラス 4 歳 9 ヶ月 4 歳 10 ヶ月 5 歳 5 ヶ月 5 歳 5 ヶ月	図 5. 作品 i 図 6. 作品 k 図 13. 作品 w 図 7. 作品 m	2 歳 6 か月	入所前 作品なし
年長クラス 6 歳 1 ヶ月 3 月卒園 6 歳 5 ヶ月	図 8. 作品 o 図 9. 作品 q	年少クラス 入園 4 月 3 歳 7 ヶ月 3 歳 8 ヶ月 3 歳 11 ヶ月 4 歳 5 ヶ月 4 歳 5 ヶ月	図 1. 作品 b 図 2. 作品 d 図 3. 作品 f 図 4. 作品 h 図 12. 作品 v
7 歳 小学校 1 年	作品なし	年中クラス 4 歳 8 ヶ月 4 歳 9 ヶ月 4 歳 10 ヶ月 5 歳 1 ヶ月 5 歳 5 ヶ月	図 13. 作品 x 図 5. 作品 j 図 6. 作品 l 図 10. 作品 t 図 7. 作品 n
8 歳 小学校 2 年	作品なし	年長クラス 6 歳 1 ヶ月 3 月卒園 6 歳 5 ヶ月	図 8. 作品 p 図 9. 作品 r

Ⅲ. 発達の比較 — 表象画テーマ「人物表現」—

図 1～13 の作品制作年齢 女兒 A 長女 女兒 S 次女 (年少 3 歳 6 か月～年長 6 歳 5 か月)

図 1

3歳6カ月～7ヶ月（年少） 入園して最初の作品		材料：クレパス
女児A 作品a. 3歳6カ月	女児S 作品b. 「かいじゅう」3歳7ヶ月	
		
3歳6カ月～7か月 映像的表象期、 女児A：作品aには、点、線によるスクリブル、左上に顔らしきものが描画されている。スクリブル後期で単体図への移行期とみられる。点・線・円などの配置がそれぞれの塊で力強く表現され、スクリブル初期の動作的表象と明らかに違う特徴を現わしている。 その以前の描画作品がなく、比較鑑賞できないが、入園当初の環境変化（登園・親離れ・新しい集団生活・部屋やトイレなどの全て）がはじめての出来事でストレスを感じていたのだろう。各スクリブルに表現差異を感受できるのは初期返りと感情浄化を試みた表現であるか。 女児S：作品bは線、点のスクリブルと、単体の円、その中には起点と終点が重なり完全に閉じられた円も見られる。スクリブルを含む単体への移行期をよく現わしている。 保育者が「かいじゅう」と記入している事から描画した形への意味づけと描画を介した語彙によるコミュニケーションも始まっている。 新しい登園生活の始まり、姉の存在で女児Aより安定した表現がみられる。		

図 2

3 歳 8 か月（年少）		材料：クレパス
女児 A 作品 c.		女児 S 作品 d.
		

3 歳 8 か月 映像的表象期

図 1. 作品 a・b から 1 か月経過し単体の形が整理され、スクリブル期の描画体験から獲得した形や線を描画に必要な部品として抽出して表現する。円の組み合わせによる「頭部人間」の集団と一人の表現である。

女兒 A: 作品 c は完全に閉じられた円、円に直線の組合せによる顔の表情、太陽のような表現と四角いキューブ状の形態が加わり、結合図の特色がみられる。

女兒 S: 作品 d はひとつの顔にらせん状の線で髪の毛を描画。円と螺旋スクリブル、塗りこみなど身についた技術を選んでいっぱい表現とし、結合図から集合図への移行期の特徴を現している。

具体的な髪の毛の表現から、特定の人物(母)のイメージを持って描画していることがうかがえる。

図 3

3 歳 11 か月 (年少)		材料: クレパス
女兒 A 作品 e. 「プールでおよいでいるわたし」	女兒 S 作品 f.	
		

3 歳 11 か月 映像的表象期

作品 c・d が「頭部人間」のみの描画であったのに比べ、円の結合図の特徴と周りの環境描写が意識され、人物とその空間を描画している。映像的表象のわかりやすい表現で、自身が見たものを、体験した記憶のイメージから描画表現している。

女兒 A: 作品 e は中心に描かれた顔が本人で、幼児表象画の「自己中心的表現」が見られる。この絵を描画している時期、女兒 A は毎晩夜中に泣きながら母親の寝室へ通う事を繰り返す習慣があった。時にはおねしょをした事を理由に同様の行動が続いていた。これは 2 歳年下の妹 S の誕生により、1 歳で母親とのスキンシップが少なくなった事への反応であり、母親を独占できる時間は夜中しかない事を生活習慣から学び行動していたと言える。画面の 4 辺をプールサイドに見立て表現している。プールサイドと上空の雲と太陽と思われる表現と中央部の私の頭上や 4 人目の顔が一部塗りつぶし行為に見える。

安定した構図の描画表現ではあるが、Aの精神的葛藤と不安が見受けられる。

女兒S：作品fは「頭部人間」に手足が付いた「頭足人間」、丸、三角、四角、記号、一定のリズムを持った線、「頭部人間」から「頭足人間」へ描画表現の発達は女兒Aに比べて女兒Sが早く入った事を示す特徴が理解できる。

図 4

4 歳 5 か月（年少）		材料：クレパス
女兒 A 作品 g. 「赤いはなばしやをみておどろいているわたし」	女兒 S 作品 h.	
		
4 歳 5 か月 映像的表象期		
入園から 1 年、年少クラス修了期でもあり、絵から楽しく元気なエネルギーを感じ取れる表現となっている。		
女兒 A：作品 g は充実した「頭部人間」から手、足が現れ「頭足人間」へ移行し、これまでなかった頭髮や黒目の表現が加わり、集合図の特徴が顕著に現れている。		
女兒 S：作品 h は人物を描こうとして体部の分割も現れ、描画表現の発達ではピクチャーステージ（絵画期）への移行期で初期絵画期と観ることができる。作品 h の裏には、日常的に目にした記憶から描いていると思われる文字や記号らしき描画も見られる。（図 12. 作品 v）		
両作品の比較から人物表現の発達に明確な違いが判る。作品 g は図 2 作品 b の集合図「頭部人間」に比べ、意識された目・鼻・口・頭髮・黒目、イヤリングの様に出た手か足が表現されている。		
作品 h は「頭足人間」に胴体が付き胴体から各部位（手足）が単体とし描き現わされた表現で、各部位が意識されていることが良くわかり、見たものをそのまま描き出そうとする映像的表象が正しくなりつつある事が理解しやすく、絵画期へ移行している初期絵画期の特徴を示すといえる。		
両者の 3 歳 11 か月の作品 e・f と比較すると、女兒 A は時間をかけながら集合図への描画発達を遂げているのに比べ、女兒 S はこの間、6 か月で描画発達が一気に進んでいる		

ように見受けられる。しかしその表現はまだ不安定で、再び「頭足人間」を描くことを繰り返す可能性も高く、いくども自身の描画体験を進んだり後退したりを繰り返し、描画表現を獲得することで安定した絵画期へ発達していくのである。

図 5

4 歳 9 か月（年中）		材料：クレパス
女児 A 作品 i. 「なかよしリズムにんじゃ」	女児 S 作品 j. 「お母さんとお買い物に行った」	
		
4 歳 9 か月 映像的表象期 描画の発達：A 集合期、S 初期絵画期 年少クラスから年中クラスになり、描いた作品 i・j である。 女児 A：作品 i は 4 歳 5 か月作品 g の「頭足人間」から、胴体が付いた人物表現であるが、再び「頭足人間」を描く事は容易で探索しながら絵画期に移行している。 女児 S の作品 j は胴体から手足が出た人物表現を安定的に描画し、集合図から確実に絵画期に移行したことを示す。地面の意識や空(太陽)の表現から、空間内の物上下関係の認知、シンボリックに描かれた太陽から映像的表象期から象徴的表象期に向う兆候が見られる。 同じ年齢、同じ時期に描画した作品から両者を比較すると表象、描画発達共に女児 A・S の発達速度に顕著な差異が現れている。		

図 6

4 歳 10 か月（年中）		材料：クレパス
女児 A 作品 k. 「なかよしリズムにんじゃ」	女児 S 作品 l. 「シャボン玉あそび」	



4 歳 10 か月 映像的表象期 描画の発達：A 集合期、S 絵画期

女兒 A：作品 k はそれまでの人物中心の描画から、空間の中の人物や家具の配置の認識が芽生えていることが分かる。心身の発達に伴い、行動範囲や視野の広がり、他者へ興味関心を抱きながら描画表現においても特定の人物や場面を見たままに映像として記憶で描く。「頭部人間」に胴体が描画されていて、胴体から手足は出ておらず座っている表現となっているのであろう。兄弟 3 人で食卓を囲んでいる様子がうかがえる。集合図で絵画期への移行前のである。

女兒 S：作品 l は保育士の記録から「シャボン玉あそび」と題され、人物（自分）を中心に洋服や靴の形体がより具体的に描画表現され、明らかに人物を描いていることがわかる絵画期に到達していることがうかがわれる。左上に描かれた太陽には表情が描画され、擬人化表現「アミニズム」が見られる。映像的表象期の特徴的な表出で自分以外の人、物との区別が曖昧な発達段階の幼児にとって、身の回りに存在するあらゆる物に自分と同様に意志や表情があると捉える事からアミニズム表現される。自分が三輪車を乗りこなし、力強く踏み込み回転を挙げると早く走ることを知ることから、自動車に乗るとビュンビュン漕いでと表現する。少ない語彙やカテゴリーから同格に表現しているのだ。

宗教的な自然崇拜、精霊信仰と同一視される由縁は、映像的表象期の盛期に自らの少ない体験をいっぱい、何とか再提示しようという欲求が強く、エネルギーさや霊的と思わせる成人には考えられない合成などの描画表現を表すことが特徴的である。

児童劇や絵本、といった子供向けのジャンルだけでなく、ピカソやクレー、ミロ、ダリと言った巨匠も研究したとされる描画表現で、同存化表現やレントゲン表現、千手観音のように機能を優先する多肢表現などもみられる。

図 7

5 歳 5 か月（年中）		材料：クレパス	
女兒 A 作品 m. 「おゆうぎ会でミニミニウエディングを踊っているわたし」		女兒 S 作品 n. 「発表会」	

5 歳 5 か月 映像的表象期 絵画期	
およそ 3 歳 8 か月から迎えた集合図を経て女兒 A は 5 歳 5 か月、女兒 S は 4 歳 9 か月で絵画期へ確実に移行している。長い探索期間を経てゆっくりと描画発達を進める姉の A に対し、妹の S は 8 か月早く絵画期へ移行していることがわかる。	
4 歳 10 か月で描画された両者の人物表現（図 6. 作品 k・1）では顕著な描画発達の違いが見られたが、5 歳 5 か月、図 7. 女兒 A 作品 m と女兒 S 作品 n の人物表現を比較しても、その表現差異はあまりない事が理解される。ステージを観客席から見た情景が描画され、その空間と並ぶ人物の中に、自分自身も中央に登場する。A の作品 m に描かれた情景は当時の写真記録との比較から、絵に表記された人物の存在は確かであるが、ふたり一組のペアで立った位置で左右逆となっている。画面左に書かれた名前の文字は逆さ文字になっていることから右左の把握はまだ曖昧である。この時期の文字は象徴的表象の文字理解と異なり、文字の形を映像で記憶して描く映像的表象であることから現れる特徴でもあることを示している。	

図 8

6 歳 1 か月（年長）		材料：クレパス	
女児 A 作品 o. 「おばあちゃんのおうち」		女児 S 作品 p. 「おもちゃ屋さんへおかいもの」	
6 歳 1 か月 映像的表象期 絵画期			

女兒 A、女兒 S 共に、6 歳 1 か月で年中クラスから年長クラスに入っの描画。

作品 o・p 共に描画内容から子どもの行動範囲の広がりを読み取れる。自分を「他より具体的に描く」自己中心的な描画表現の特徴がみられるが、建物、樹木、人物の大きさの対比を把握出来るようになり、自己と他者の存在の違いを認識し始めている。映像的な記憶が鮮明で自分以外の空間描写がより具体的に現されている。

女兒 A：作品 o「おばあちゃんのおうち」に描画されている家の窓、その形や位置、樹木はその種類により表現の違いがあり葉の形、幹の色は実体験の観察、映像記憶から再現され描画行為に対する執着と意欲の強さが伝わってくる。この時期、保育士から母親へ、A の描画に対しポジティブな評価が伝えられた事をきっかけに、母親は家庭で子どもがいつでも描画できる環境を整え、兄妹には好きな時に自由に描画できる環境が用意されていた。

女兒 S：作品 p「おもちゃやさんへおかいもの」の画面に書かれた「こどもや」は逆さ文字もなく書きなれた自身の名前ではない文字を確実に書いている点から、S が映像的表象期から象徴的表象期に移行しつつあることがうかがえる。

図 9

6 歳 5 か月（年長）		材料：クレパス	
女兒 A 作品 q.	「発表会」	女兒 S 作品 r.	「発表会」
			

6 歳 5 か月 映像的表象期から象徴的表象期へ 絵画期

女兒 A、女兒 S 共に年長クラス修了期の行事「発表会」を描画。作品 q・r は 1 年前の年中クラス 5 歳 5 か月で同じテーマを描画した、図 7。作品 m・n と比較すると、クレパスをコントロールする身体能力の発達、描画表現においてはステージを見る後ろ向きの観客、ステージ、演者の最前列、2 列目、3 列目と 5 段階の重なりを持って描画表現され、「誰々がいた」という記憶だけでなく、空間の幅、奥行きといった位置関係も正しく記憶して描いている。

子どもの描画表現の発達において、空間や左右の認識が出来る様になり、映像的表象期に見られる逆さ文字も徐々に減少し、象徴的表象期を迎える。モノの位置関係で見えないものがあることを理解して描くことができて、レントゲン描写もなくなってくる。

Ⅳ. 発達の比較から考察 —子どもの絵から視えてきたもの—

項目Ⅲ. 発達の比較で示した、図1. 3歳6か月(年少クラス) 入園して最初の作品から、図9. 6歳5か月(年長クラス) 卒業前の行事「発表会」までの作品比較からは、5歳5か月(年中クラス終盤)までの発達は、女兒A(長女)に比べ女兒S(次女)は表象の発達と描画の発達において、ステージの移行が速かったことがわかる。

とくに、絵画期への移行はSが4歳9か月、Aが5歳5か月と、両者に8か月の差がある。しかしながら、Sに比べAは保育の頃から描画を好み、Sより描画経験が豊富であった。このことから、描画経験の量と発達の速度は必ずしも比例しないことが分かる。

特にAの集合図における探索は長く、新しい形態表現を獲得すると、繰り返しその形態を使って何枚も描画しながらゆっくりと発達している。一方、Sは同じ表現の探索は短く繰り返す実体験は少ないが、新しい表現の獲得が速い。表象の発達も同じ表象期にあって、次の表象への兆候を早く認められたのは、Sである。

そして、5歳5か月、図7. 作品m・nにおいては女兒A、女兒S共に安定した絵画期に入り、描画発達の表出に差が見られなくなり、ゆっくりと発達してきたAの描画活動に対する意欲と表現力の高まりが作品に強く現れていることに注目すべきである。

このように同じ年齢を同じ環境で育ったふたりの比較から、描画回数が多ければ発達が早まるとは断定できないが、時間をかけ、実際に描画体験を繰り返しながら獲得した表現は、安定的に定着し描画表現を豊かにすることがわかる。

なぜ女兒Sの発達が速かったのか、描画を比較検証するためには女兒Aと女兒Sの置かれた家庭環境や家族関係に目を向ける必要がある。長男、その3歳下の長女A、2歳下の次女Sの兄妹構成の中でSは末子として、日常的に兄と姉の行動を見て学習する機会も多く、Aが試行錯誤しながら描画を繰り返し、実体験から表現を獲得したのに対し、動作的表象、映像的表象の時期、Sは実体験と年齢に近い姉との日常的なあそびの中で描画や文字(4歳5ヶ月の作品に文字や記号らしき描画)の表現を目にし、視覚的な体験から表現の模倣により獲得する機会も多かったと考えられる。

1歳で妹が誕生し、母親が幼い妹に手がかりだした長女のAと比べ、末子のSは、母親とのスキンシップやコミュニケーションの時間も充実していた。上の兄妹の存在、母親とのコミュニケーション、そのような環境の中でSは安定して言語、描画、文字の獲得、自己表現を兄妹の中で学習し、最も速い発達を見せたのである。

図3. の解説にあるように、3歳11か月女兒A: 作品eは、妹(女兒S)が1歳11か月、Aは毎晩夜泣きやおねしょを繰り返し、夜中に母親のもとに通う日々が続く、描画にもその不安が表出している。子どもの不安や葛藤が描画表現されているのはごく自然なことで、描画活動に心の不安や葛藤を浄化する作用もある事を示している。この点は子どもの創造的能力の発達と、精神の治療的価値をフィンガーペインティングに見出した創始者であるルース・フェゾン・ショウ(Ruth Faison Shaw)(宮武, 1985)や幼児画の研究および、幼児画及び絵を通しての教育法の研究者である宮武辰夫(宮武, 1985)の論からも証明されて

いる。また、女兒 A に描画表現への執着行動が認められ、熱心に描画する A の行動から、保育者に「絵がとっても好きな子」として捉えられていたことから理解できる。

描画表現の発達同様、言語表現の発達に時間を要した A にとって母親や保育者の評価を得ることが出来る唯一の自己表現手段であったのである。母親を自分に振り向かせたい本能的欲求が熱心な描画活動につながり、担任保育士から母への助言により、いつでも描画出来る環境が整えられ、日常的なあそびの中で積み重ねられた描画の実体験が、独自の表現力を自然と必然的に育んだのである。

V. 発達の比較まとめ ―幼児教育現場における幼児表象画の支援のありかた―

3 歳～4 歳（図 1～6）の表象は動作的表象から映像的表象へ、描画表現はスクリブル後期、単体図、結合図、集合図と発達を示し、それら全ての描画表現の特徴を持ち合わせながら成長する。

生後 10 か月頃から開始されるスクリブルの描画経験から、次の単体図へ発達を進めるため全ての描画表現を幾度も繰り返し探索することから、描画形態の獲得がおこなわれるのである。このスクリブル図 1. 作品 a、図 10. 作品 s に見られる『点』『線』の描画は、子どもにとって次のステップに進むために必要な準備行為（描画活動）であることを理解しておかなければならない。

集合図から絵画期に入り、具体的な形のあるもの、テーマを持ったものを描く時、スクリブルを描画する事はたびたびある。（図 10. 作品 t）その際、「こないだはあんなに上手に描けたのに…」という心配は無用なのである。むしろ、新しい表現を探索している大切な描画活動と捉え、その作品を通した子どもの表現、語り掛けに耳を傾けながら見守る姿勢が大切である。

目に見えない、思考の邪魔をしない教育、寄り添いや支援が充分な環境で安心して自由に、のびのびと探索し、表現を繰り返せることが最も大切な教育と言える。

1 年あまりの間に週単位で表象、描画表現とも次のステップへ発達を遂げながら歩を進めるこの時期、月齢や個性、家庭環境、兄妹の有無などによって次へ進むタイミングは子どもによって異なる。その速さは能力の優劣とは関係なく、安定した描画環境が得られれば、子どもは自分のペースとタイミングで発達の歩を進めるのである。

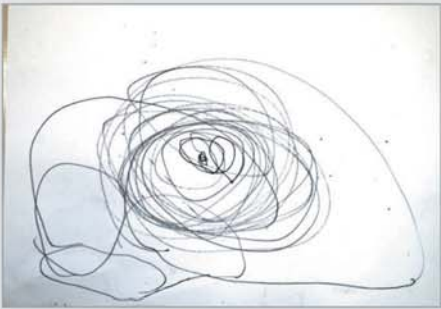
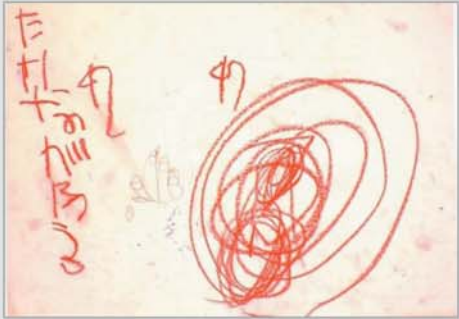
宮武（宮武, 1985, p. 43）は、動作的表象から映像的表象であり、絵画期に入る前の探索時期を「いじくり期」と定義し次のように述べている。

この“いじくり期”は子供によってずいぶん違うものであって、或る子供は直ぐに何かを表現しかけるが、或る子供は、幼稚園に通ってもしばらく、このいじくり期の実験を続けている。この場合、早くものの形の出来上る子供を利口だなどと考えるはならない。干涉好きで虚栄の高い母親などにかゝつては、大切な実験期を奪われて親に教えられた通りの依存模倣となり、お人形とチュウリップなどを悪巧みに描くものだ。

それに反して、後れているように見えても、長い間克明にこのいじくり期を実験している子どもが、一度殻を破つてのり出して来ると、素晴らしい速力で追っかけてくることがある。而して早いように見えた概念組は、いつまでも足ぶみ停滞している。

以上の点からも保育士、保護者が共通認識の上でひとりひとりの子どもの個性や発達を理解し、尊重しながら支援を行うよう心掛ける事が重要である。

図 10

スクリブル作品		材料：作品 s. マーカー ペン / 作品 t. クレパス	
男児 K	作品 s. 3 歳	女児 S	作品 t. 5 歳 1 か月
スクリブル期・動作的表象		絵画期・映像的表象	
			

子どもの絵は心の鏡と言われるように、描画にはその時の子どもの心のあり様が素直に表現される。ルース・フェゾン・ショウ (Ruth Faison Shaw) は「絵は子供にとって下剤なり」(宮武, 1985, p. 52) と唱え、描画活動を通して子どもが抱えた感情的緊張を解放した。

図 3. 作品 e の子どもの葛藤が表出された描画表現は、描画行動自体に問題はない。「おばけ怖い」と言いながらお化けを描画し、更にそれを塗りつぶす、といった描画行為の痕跡は、女児 A や女児 S の縦断的発達作品資料の中にも見受けられる。(図 11. 作品 u) このような描画活動によって、子どもが何らかの不安や恐怖、葛藤から解放される事もあると理解し、静かに子どもの描画表現や気持ちに寄り添い、共感支援できる事が身近な保育者に求められる対応でもある。

注意すべき点として、子どもの描画は、子どもの心の中に潜む問題を保育者が探索するためのものではない。あそびの中で自然に現れた子どもの表現から保育者が読み取り、子どもを理解するきっかけになるに過ぎないのである。毎日子どもと接し、こどもの生活全般をよく知る立場の保育者はいつもと違う絵、気になる絵を子どもが描いた時、それまでの子どもの描画のありよう、こどもの生活やあそびの環境全般に気を配りながら、子ども

が自由に自己表現出来る環境を整え、観察することが重要である。自発的に描画行動が行われる場合、子ども自身が描画の繰り返しから不安や葛藤を自己消化することもあると考え、保育者が直接的に係わるか、その必要性を慎重に判断すべきである。

また色や形、一定のパターンから子どもの心理状態を計るマニュアルのようなものは存在しないと考えることが大切である。

図 11



図 7. 女児 A による作品 m に子ども自身が書いた文字が現わされている。この時期、子どもが文字に興味を持ち、文字らしき形が描画の中に表出することは不自然ではない。縦断的作品群では女児 A、女児 S 共に年中クラスになると文字の表記が始まり、描画の中の一定の場所に書かれている点から、保育者による指導で描画に名前を書く指示があったことがうかがえる。また、女児 S の年中クラスの縦断的作品群と一緒に、「せんのあそび」というドリル形式の文字や記号の練習帳が保存されていた。このことから女児 A と S が通っていた保育所では、年中クラスからこのドリルによって文字の学習を始めていた事実が確認できる。

女児 A の描画に文字の表記が始まったのは 4 歳 10 か月（図 13. 作品 w）女児 S は 4 歳 8 か月（図 13. 作品 x）あった。

両者とも象徴的表象の前、映像的表象にあり、文字や記号の意味を理解する発達段階ではない。図 13. 女児 A 作品 w、女児 S 作品 x の文字表記からはお手本を映し取ろうとしている様子がうかがえる。S の作品 x は描画内容も花壇の花を眺める自分は逆さまで（方向性の無視）、自分の目線で自由に上下関係を描画しているのが分かる。まだ物の上下や左右が明確でなく描画においても自分が知っている形を自由に描く表象画であり、物の形を見ながらそれを写実するにはまだ早い時期に、文字のお手本を見せ、それを書いたり練習させることは子どもの発達の不理解と言わざるを得ない。子どもは園や家庭環境、生活の中で自然に目に入る文字、兄や姉が文字を書いたり読んだりする姿から主体的に文字に

興味持ち、それが描画の中に文字や記号のような形として描画される場合がある。(図 12. 作品 v) これは子どもの意志と自分が興味関心あるものを描画している点で自然な描画行動であり、子どもにとって自発的な探索と言えるが、大人の指示や教育として行うには 5 歳に満たない段階ではまだ早いのである。

図 12

女児 S 作品 v. 4 歳 5 か月 映像的表象期 絵画期への移行時期 材料：クレパス	
図 4. 作品 h の裏に描画 数字（紫色）やアルファベットらしき形態（橙色）、記号や幾何学形態（紫色・橙色）が認められる。 年少クラス、S による自発的描画	

図 13

縦断的作品群から A・S の文字表記開始作品 材料：作品 w. クレパス／作品 x. マーカー ペン	
女児 A 作品 w. 4 歳 10 か月	女児 S 作品 x. 4 歳 8 か月
	

縦断的作品から、女児 A の文字表記は年中クラスの 4 歳 10 か月の作品から始まり左右逆の鏡文字を交えたものが 6 歳 2 か月の年長クラスまで続き、以後最後の描画作品 6 歳 5 か月の文字表記は鏡文字を自身で修正している点から象徴的表象への移行が確認できるのである。女児 S 最初の文字表記は 4 歳 7 か月から始まり鏡文字を交えた表記が 6 歳 1 か月まで続き、以後の文字表記には鏡文字も修正の後も見られないため、この時期より象徴的表

象に入っていることを示しているといえる。

女兒A・Sの文字表記の比較から、両者とも6歳2か月には象徴的表象に移行した事が確認できる。描画発達においてはAに比してSは速く発達を遂げたのと比べ、文字表記においてはSがAより早い、安定的に象徴的表象に入る時期はほぼ同じである。両者とも映像的表象から歩みは違っても、ゴールに行きつく時期はほぼ同じだったのである。

この事から、発達段階の途中では発達が速いと捉えられる子どもも、ゆっくりと成長し、発達が遅れているように見える子どもも、ほぼ同じ時期に象徴的表象へたどり着いていることが分かる。

文字を左右逆さまに書く鏡文字や絵を上下逆さまに描くなど、映像的表象の子どもの描画や文字表記は大人の考えつかない自由な表現がなされる。特に文字表記は絵画より正誤の判断、正しく書けるか書けないかの評価をしやすいため、鏡文字に関する保護者からの問いや相談に応じる際は、表象の発達を通した子どもの認知や表現を充分理解し、それぞれの子どもの個性に応じた解説が必要である。

哲学者ジャン・ジャック・ルソー (Jean Jacques Rousseau, 1762 永杉・宮本・押村訳, 1965, p 64) は、

こどもは人間の生涯の秩序のうちに立場をもっている。だから大人は大人の座で、子どもは子どもの座で考えねばならない。各人にそれぞれの立場を定め、その立場に安定せしめること、人間の本能に従って諸情念を秩序づけること、これが人生の幸福のためにわたしたちがなし得るすべてである。

と述べ、完成された大人とは異なる発達にあるひとりひとりの子どもの歩みを尊重することの大切さを我々に示している。

時に保護者よりも長い時間を一緒に過ごし、子どもにとって最も身近で信頼できる立場となる保育士は、日々の観察や気づきを通した子どもの理解者として発達の速さや他の子どもとの比較から安易に子どもの優劣を決めつけることなく、それぞれの子どもの歩みに尊厳を持って接し、表象、描画の発達を理解したうえでひとりひとりに寄り添い、粘り強く日々の観察を積み重ねながら、子どもの作品へのかかわりと支援のタイミングを学ぶ事が重要である。

VI. 幼児教育現場における美術表現技法の活用

ー幼稚園教諭を対象とした調査からー

1970年代に制作された女兒A・Sの縦断的作品群の中には絵の具を使ったドリップング、コラージュ、スタンプング、スパッタリング、デカルコマニー、パチックといった美術表現技法で制作した作品が含まれるため、A・S共に同じ保育所に通い3歳から6歳の間にこれらの技法による制作体験していることが確認できる。

近畿大学九州短期大学保育科、保育科通信教育部においても、絵画表現の基礎学習としてこれら美術表現技法を演習講義、通信レポート課題に取り入れられている。

これら美術表現技法の幼児教育現場における 2017 年現在の活用状況について、幼稚園教諭を対象としたアンケート調査結果を報告する。

(1) 調査方法

1) 調査対象 近畿大学九州短期大学主催

教員免許状更新講習（幼稚園教諭対象）参加者 50 名

2) 調査実施日 2017 年 9 月 3 日

免許更新講習「幼児教育で使われる基礎技法の習得と『絵本作品作り』の素材としての表現技法の確認。ドリップング、パチック、スタンプング、スパッタリング、ストリングデザイン、ローリングオブタイプなどの絵具遊びの技法を使った素材による『絵本作り』演習」を受講後、アンケート調査を実施。

3) 調査内容

現在所属している幼稚園において、下記の項目に現在実際に取り組んでいる技法があれば○で囲んで下さい。下記の項目以外の技法は⑨その他に技法と解説を記入してください。

1. ドリップング 2. コラージュ 3. スタンプング 4. スパッタリング 5. ストリングデザイン 6. ローリングオブタイプ 7. デカルコマニー 8. パチック
9. その他 技法：解説

(2) 調査結果

調査対象者である免許更新講習参加者 50 名の中に、現段階では幼児教育機関に従事していない参加者が 3 名いた為、回答者は 47 名となった。

表 1 質問項目 1～8 までの集計結果と A・S の縦断的作品群の技法導入状況の比較

アンケート調査集計結果				女兒 A・S の縦断的作品群から	
技法名		技法導入数		導入の有無	技法導入年齢
		47 名中	導入率		
1	ドリップング	34	72%	○	4 歳
2	コラージュ	34	72%	○	3 歳～6 歳
3	スタンプング	45	96%	○	4 歳～5 歳
4	スパッタリング	15	32%	○	3 歳～5 歳
5	ストリングデザイン	4	9%	なし	なし
6	ローリングオブタイプ	5	11%	なし	なし
7	デカルコマニー	31	66%	○	3 歳～4 歳
8	パチック	5	11%	○	3 歳～6 歳

表2 質問項目 9. その他の技法（自由記述）の集計結果と A・S の縦断的作品群の技法導入状況の比較

	その他の技法名	技法導入率		女兒 A・S の縦断的作品群から	
		47 名中	導入率	導入の有無	技法導入年齢
9	染紙	5	11%	○	5 歳
	フロッタージュ	3	6%	○	4 歳～5 歳
	版画	1	2%	○	5 歳～6 歳
	スクラッチ	5	11%	○	3 歳～4 歳
	マーブリング	5	11%	なし	なし

女兒 A・S による縦断的作品群が制作された 1970 年代と 2017 年現在の幼児教育現場における美術表現技法の活用状況の比較から、およそ 40 年以上前から、これら美術表現技法が幼児教育の現場で活用され続けていることがわかる。

日々の生活やあそびの中で、健康、言葉、環境、人間関係、表現（幼稚園教育要領・保育所保育指針 2017）といったあらゆる領域と実体験を通してかかわりながら発達を遂げる子どもにとって、これらの美術表現技法の体験は五感を使った創作活動として、時代が変わっても継続され続ける必然性があるのであろうか。

気になる点として、これら技法の作品活用において、A・S の作品群の中に、幼児の絵画や表象の発達段階より先んじた指導のありようが見受けられた。親の目を気にして、作品としての完成度を求める保育者の価値観を主体にした指導は、子どもが創作する喜びを享受し、体験から獲得する大切な機会を奪ってしまう可能性がある事を改めて認識しておく必要がある。

本調査を行った免許更新講習において、アンケート調査結果の中で最も導入率の高かったスタンピング技法（96%導入）について、調査対象者から次のような実例が挙げられた。

食べ物の好き嫌いが激しく、あらゆる手段で食べ物の好き嫌いを改善しようと試みたが、特に野菜を食べようとしなかった子どもが、野菜を版に使ったスタンピングを制作体験したところ、野菜に興味を抱き、それから野菜を食べるようになった。この事例からも、個々の子どもが大人とは異なる認識・表象と共に生活し、あそびという主体的活動を通してさまざまな領域に触れながら探索し、発達を遂げている事が読みとれる。

本調査においては、園全体の取り組みとしての現状調査を行った。今後の課題として、幼児教育現場における年齢別の技法導入状況や具体的な活用方法など、より詳細な調査を行い、子どもの発達に応じた美術表現技法の活用のあり方や支援方法を提案していきたい。

あとがき

本論考の基礎資料は、近畿大学九州短期大学保育科演習講義での教授、ならびに研究活動の傍ら、日本漆工協会、自由美術協会会員として、国内外の展覧会へ出品するなど、美術作家活動も盛んにこなしている竹永の幼児期の作品群である。

本縦断的記録の資料収集は母親、竹永和子が三兄妹の保育所時代（3歳～6歳）の作品群を保管していた功績によるところが大きい。竹永自身については、高校時代より美術作家としての専門的学習を始めたころから本日までの作品記録があり、幼児期の作品群が同一保育所ではぐくまれたこと、妹・兄の3人分があったことは大変貴重な縦断的資料である。

本校保育科幼児美術教育に竹永を迎えたことで資料の特定が少ない縦断的的作品群（3歳から修学前まで）の指導資料がそろい、学生たちの教授と個性的作家としての憧憬の深い理解者を得たことを評価している。

偶然にも私たちが本論の指針としているブルーナー『認知能力の成長』原書 J. S. Bruner, R. R. Olver and P. M. Greenfield et al 『STUDIES IN COGNITIVE GROWTH, —A Collaboration at the Center for Cognitive Studies—』 New York. London. Sydney: John Wiley & Sons, Inc. 発行が1966年、ケログ『児童画の発達過程』原書 Rhoda Kellog 『Analyzing Children's Art』 National Press Books. California. 発行が1969年、当資料の収集が女兒A、3歳6か月1972年に始まっていることから、その誕生はブルーナーとケログの出版の間で護られている実事が、何という偶然か、運命の巡り合わせを感じえるものである。

資料群を観察、拝見して、現在も変わらず行われている美術表現技法の指導。弱い幼児達への教育内容が園児たちよりも保護者へのアピールが優先される園の運営方針や、作品背景に見え隠れする時代の特徴があることも理解できる。

保育者が残した幼児作品へのわずかなコメントの情報ではあるが記録が残ることによりも個人の成長、作者自身の育ちを読むことから人生を顧みることになり、明らかに、よりたしかな今後、教育者として、親として、作家としての人生に、深く、広く、生かされ、教授されると確信している。

現在は、バーチャルリアリティーの時代、多くの子どもが生まれた時から視聴覚機器にまみれている家庭環境の中で成長してくる時代に、この縦断的資料が存在したことで、教授された多くの学生が幼児表象画の大切さを学び、1歳～3歳の動作的表象、3歳～5歳の映像的表象の造形表現だけでは十分に私たちに伝えきれていない幼児の神々しい造形作品、描画活動が大切で、尊厳されるものに値することを学び知るのである。

貴重な資料を何度も何度も研究し、次世代を担う後継者の育成に取り組んでいただくこと。何よりも大切な幼児の命の活動に寄添い、支援する、見守り、実体験の環境を整え、記録する援助者の育成を切に願い論を置く。（埴）

参考文献

- 1) J. S. ブルーナー著, 岡本夏木他訳 (1976) 『認識能力の成長 (上)』, 明治図書出版.
- 2) ジャン・ジャック・ルソー著, 永杉喜輔他訳 (1965) 『エミール』, 玉川大学出版部, p. 64
- 3) 鳥居昭美著 (1995) 『子どもの絵をダメにしていますか?』, 婦人生活社.
- 4) 内閣府編著・文部科学省編著・厚生労働省編著 (2017) 『平成 29 年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 原本』, チャイルド本社.
- 5) 塙和道・竹永亜矢著 (2016) 「幼児表象画に学ぶ、講義「人物画演習」の導入法と描法」『近畿大学九州短期大学研究紀要』, 第 46 号 pp. 47 - 51
- 6) 宮武辰夫著 (1985) 『幼児の絵は生活している』, 博文社.
- 7) ローダ・ケログ著, 深田尚彦訳 (1998) 『児童画の発達過程 — なぐり描きからピクチャーヘー』, 黎明書房.